九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

幕末異国情報の伝播と長崎橿園社中(上)

吉良, 史明
福岡国際大学 : 講師

https://doi.org/10.15017/1462194

出版情報：語文研究. 116, pp.42-60, 2013-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

幕末異国情報の伝播と長崎橿園社中（上）

吉良史明

はじめに

近時、揖斐高監修「江戸文学」第三十二号[注1]は、近世の人々が異国に抱いた眼差しの実体を明らかにするために「江戸文学と異国情報」と題した特集を組んだ。木越治「秋成の異国、宣長の異国」を始めとして、収載された十数編の論攷には刺激されるところが大きいものの、惜しむらくは幕末長崎の国学者の文事が俎上に載せられていないことである。

例えば、同地の歌壇を文政から安政にかけて先導した中島広足の文芸に関しては、早くも戦前に彌富破摩雄「海洋文學者としての中島廣足[注2]」ならびに同「廣足の歌文に現れたる異國事項[注3]」が執筆され、広足は長崎の地を活躍の舞台として国学結社橿園社中を興し、異国情緒漂う文物を自らの歌文に表現していたことが明らかにされている。復古的な思想を抱く一方、西洋文化の摂取を試みる広足の瞳には異国がいかなる存在として映っていたか、興味深い問題といえよう。しかしながら、彌富の両論文は舶来の文物を題材とした広足歌文を紹介することに終始した観がある。元来肥後細川藩士である広足が何故長崎の地に橿園社中を築いたか、また同地においていかなる情報をいずれの筋から入手し、自らの文事の糧としていたか、さらに手にした情報をもとに形成された広足の異国に対する認識の実体を解明するまでには至っておらず、さらなる検討が求められよう。

そこで本稿は、広足ゆかりの鎮西大社諏訪神社に伝存する諸資料に基づき、一に広足が橿園社中を結社するに至る経緯

と門人組織を検証、二に広足が異国情報を入手した経路の特定、三に情報をもとに構築された広足の思想の解明、四に長崎の広足のもとより発信された情報に基づき当代の国学者が盛んに海防の議論を闘わせ自らの文事に反映させてゆく模様を論じる。以て幕末国学者の情報ネットワークの一端を明示し、その文事との関連を考察してゆきたい。

なお、門人組織の検証に不可欠な『瓊浦集』作者姓名録を附したことにより、本稿を紙幅の都合上（上）（下）の二回に分けることとした。今号においては広足の思想を論じた第三節までを掲げている。御了解頂きたい。

一　長崎檀園社中の結社とその組織

文政五年（一八二二）旧暦の十月三日、三十一歳を迎えた広足は、かねてより心に思い描いていた長崎の地を初めて訪れた。その折、同地の主たる歌人であった諏訪神社大宮司青木永章（ながふみ）、長崎会所請払役の近藤光輔の両人を始めとして、数多くの人物と誼を結び得たことは、広足の後半生を大きく変貌させ、長崎の歌壇を興隆に導く出来事であったといってよい。以後広足は、熊本と長崎を足繁く往還し、文政九年（一八二六）九月に永章から諏訪大宮司学校の教授方として招請され、同地に檀園社中を築き、国学ならびに歌壇の振興に尽力することとなる。

かくして組織された檀園社中に関しては、岡中正行『中島広足の研究』（私家版、平成二十三年）が門人構成の検証を試み、一部の門人の経歴を明示しているものの、全貌を把握するところにまでは達していない。それは、鈴屋社中等の他の国学結社と異なり、檀園社中の門人録が現存しないことに起因すると思しく、全容の解明には困難が伴う。しかしながら、問題解決の糸口となる資料もまた少なからず伝存する。その一つが広足編『瓊浦集』（天保十一年凡例二巻二冊）である。同書は、広足自らが凡例に「此集は、長崎の人々の歌をえらびあつめたる也」と明記するごとく、長崎ゆかりの歌人の歌を編んだ類題集である。そして、その見返しには「中島広足著／瓊浦集　初編二冊／社中蔵」とあり、檀園社中の面々が出資して上梓に及んだことが看て取れる。[注4] すなわち、広足門人の詠歌を軸として取り纏められたことが想定されよう。試みに巻頭五首の歌人名を列挙すれば、光輔・永章・高石甫平・家原衍年・半田公麿の各人の名が挙げられ、いずれも広足知友ならびに門人であることが知れる。かく檀園社中の中核に位置した人物が巻頭を占めていることに鑑みても、同書は広足門人の詠歌を軸として編纂されているといえよう。

一方、同じく凡例に

○この集の歌、かならずしも長崎人のみにはかぎらず。さるは、京・江戸・難波はさら也、こと国々より来ゐる人おほきが中には、おほやけごとにて久しくとゞまれるも有、またつねに行かよふもあり、やがて此さとにすみつきたるもあり。いひもてゆかば、大かた此さとにてなかばにちかくはこと国人なるべし。されば、こと人の歌は絶てくはへじといはんには、撰者もまた筆をとりがたければ、ことなるゆかりある人々のは、みなえらび入つる也。されど、ふみかよはすばかりにて、一たびも長崎にきたりし事なきは、ちかき国人にても一首もくはふることなし。(注5)

と記されており、長崎のみならず江戸・大坂・京都を始めとする他国の歌人の詠歌もまた少なからず入集している点、注意される。三都等の主たる都市及び長崎近隣の諸国に限定されるものの、橿園社中が全国的に門戸を拡げつつあったことの証左となり得る事柄であり、後に広足が長崎から大坂へと進出することとの関連からも注目される。そこで、同書に入集する歌人百七十名の作者姓名録を作り、各人の国名・通称・身分もしくは役柄の特定を試みることにより、以下改めて橿園社中の門人組織を検討してゆく。

なお、姓名録の作成に際しては、次の手順を経た。まず始めに、森繁夫編・中野荘次補訂『名家伝記資料集成』(思文閣出版、昭和五十九年)ならびに各類題集の作者姓名録、高階惟昌『国学人物志』(安政六年跋刊 一冊)に基づき、入集した各歌人の通称名・国名を確認した。次に、オランダ通詞会所の記録である長崎県立長崎図書館編『オランダ通詞会所記録 安政二年 萬記帳』(長崎県立長崎図書館、平成十三年)、長崎地役人の分限帳である越中哲也編『慶応元年 明細分限帳』(長崎歴史文化協会、昭和六十年)、同じく地役人の姓名を記した『文政元戊寅年 長崎地役人名前』(長崎歴史文化博物館蔵 複製本一冊)、京都糸割符宿老を勤めた巨智部忠陽の日記『日録』(長崎歴史文化博物館蔵 天保十一年成立 写本一冊)、同『要録』(長崎歴史文化博物館蔵 天保十五年――慶応二年写本二十二冊)等を参照して、各人の身分もしくは役柄を特定した。さらに、右の手続きを経ても明らかにし得ない人物に関しては、前掲『中島広足の研究』を始め、静嘉堂文庫所蔵『瓊浦集』に附載される西純三「瓊浦集人名之内」(注6)等の先学の研究に拠った。なおも詳らかにし得ない歌人も相当数に及ぶが、先賢諸氏の御教示を請う次第である。

〔凡例〕

一　本表は、全ての『瓊浦集』出詠歌人を五十音順に配列し、各人の国名・通称名・官職を記したものである。

一　『瓊浦集』が刊行された天保十一年（一八四〇）頃に各歌人が在住していた国名、またその折の通称名・役柄を原則として記した。

一　西純三「瓊浦集人名之内」の記述に拠る際はその項目の末尾に（西）、岡中正行『中島広足の研究』を参照した場合は（岡）と記した。

あ

青木永勇　肥前長崎　諏訪神社大宮司　永純男
青木永繁　肥前長崎　驥三郎　諏訪神社祠官
青木永純　肥前長崎　諏訪神社祠官
青木永鷹　肥前長崎　兵庫之助　諏訪神社大宮司
青木永弘　京都　長次　諏訪神社大宮司
青木永古　肥前長崎　大進　諏訪神社大宮司　永章男
青木永章　肥前長崎　左京　諏訪神社大宮司　永鷹養子
青木紀伊
青木栄瀬　肥前長崎　永章妻
浅井ぬひ
浅井保道
蘆塚恒徳　肥前長崎　五郎助　唐年行司
飛鳥本孝　肥前平戸　愛次郎　平戸藩士兼壱岐住吉神社宮司
阿部実勝
家原衍年　肥前長崎　嘉治助　惣町乙名頭取
石尾光雄
石崎利嘉
伊関元智　肥前長崎　忠次郎
磯野信春　肥前長崎　大和屋由平　今鍛冶屋町書肆兼絵師
伊藤常香　肥前長崎　太兵衛　築町菓子屋兼諏訪社用人（西）
伊藤常城　肥前長崎　伊勢次　築町菓子屋　常香男（西）
伊藤信親
伊藤宜繁　肥前長崎　正右衛門
伊奈直興　肥前長崎　加津磨（姓渋江）　河内町水神神社宮司
伊奈るいは　肥前長崎　長崎松森神社宮司伊奈建彦妹
植木貴恒　肥前島原　隼太（中島広行）　諏訪神社宮司
内田近隆
宇野利真
永聖院丈山　肥前長崎　福済寺末庵永聖院住持
江上浄通　肥前長崎
江上慶之
大津山晴樹　肥前長崎　大津山善八郎　長崎会所請払役
大友義郷
大橋ひさ　肥前長崎　瞽女（西）
岡部春平　京都　大蔵　元石見浜田藩士
半田公磨　江戸　宗十郎

半田親延　肥前長崎　宗次郎
小沢春信
小田充興　肥前長崎　喜三兵衛　出島町乙名
巨智部忠陽　京都　英三郎　京都糸割符宿老
鬼塚貞孝

か

何茂雄　肥前長崎　元之丞
海部可昌　和泉堺　市右衛門　堺糸割符宿老
楽常寺拙誠　肥前島原　楽常寺僧侶
勝木信敏　肥前長崎　利助　唐通事附筆者
金井起俊
金谷興詩　大坂　興右衛門　大坂天満組総年寄
金谷興議　大坂　大坂糸割符宿老（岡）
北島祐栄　肥前長崎　伝助　今博多町乙名
北島長雄　肥前長崎　熊之助
木下相宰　肥前長崎　志賀之介　八幡町乙名
木下従賢　肥前長崎　潤太郎　八幡町乙名　逸雲兄
木谷いつ　肥前長崎　木谷忠英女
木谷忠英　肥前長崎　与一右衛門　桜町薬種屋
木谷ぬな　肥前長崎　木谷忠英女
教法寺合明　肥前佐世保　教法寺僧侶
工藤俊章　肥前長崎　古十郎　長崎会所筆者（西）
隈川春雄　京都　弾正（姓山口）
隈川春蔭　京都　八郎（姓山口）
光源寺拙嵒　肥前長崎　秋香亭　光源寺第九代住持
光源寺てい　肥前長崎　拙嵒妻
光源寺道英　肥前長崎　光源寺第十代住持
晧台寺黄泉　肥前長崎　雖小庵　晧台寺住持
小南保重　肥前長崎　彦助　長崎会所取締役
近藤光輔　肥前長崎　半五郎　長崎会所請払役

さ

佐藤宅喬
志賀親憲　肥前長崎　九郎助　浦上村渕庄屋
品川有通　肥前長崎
渋谷以旧
島重胤　出雲杵築　兵庫　出雲大社上官
島重道　肥前長崎　雅楽之助　長崎伊勢宮神社祠官
島田盈守　肥前長崎　惣兵衛　御救銀会所請払役頭取
島田宜明　肥前長崎　茂助　酒屋町大和屋（西）
島谷長春　肥前長崎　儀兵衛　長崎会所請払役
島谷春弘　肥前長崎　覚蔵　長崎会所請払役助
清水正良　京都　藤左衛門　京都糸割符宿老
釈珂山
正覚寺弘範　肥前長崎　月雪香　正覚寺僧侶
白木久樹　肥前長崎　長右衛門　波止場役
白木久世　肥前長崎　金之丞
白浜為隆　肥前長崎　嘉四郎　江戸町乙名
杉山賢功　肥前長崎　竜左衛門
杉山騰翁
角谷暁昌　肥前長崎　作助　新興善町乙名

た

大徳寺尊春　肥前長崎　大徳寺僧侶
大平寺寛峰　肥前長崎　大平寺僧侶
高石祐由　和泉堺　幸右衛門
高石甫重　肥前長崎　新十郎　出島乙名
高石甫平　肥前長崎　文治右衛門　出島町乙名
高階方叔　肥前長崎　宗吾　町年寄福田猶之進家来（西）
高島音全　肥前長崎　鷹頭　御年寄高島作兵衛伯父（西）
高田広端　肥前長崎　衛十郎　宿老筆者（西）
高野興善　肥前長崎　五郎助　商人　小田充興弟（西）
立身万平　肥前長崎　万兵衛　東中町書肆
谷川望古　肥前長崎　勇平　町年寄高木清十郎家来
柘植蔭夏　肥前長崎　長次郎　長崎会所請払役
田親辰　筑後三井郡　儀一郎（姓吉田）　大庄屋
徳岡幸夏
戸田元承　肥前長崎　半吾　遠見番触頭

な

内藤有良
内藤利師
中尾定淵
長岡光治　肥前長崎　文治郎　商人（西）
中村茂済　肥前長崎　嘉右衛門　本籠町商人
中村得一　肥前長崎
中村ゆき　肥前長崎　茂済妻
中村義隆
楢林公足　肥前長崎　オランダ通詞
楢林枝栄
西田秋実　肥前長崎　守輔　諏訪神社祠官
西村章根
野口祐之　肥前長崎　権次郎

は

馬田永親　肥前長崎　又蔵　長崎会所吟味役助　永成男
馬田永成　肥前長崎　又次右衛門　長崎会所吟味役
馬田本孝　肥前長崎　猪十郎　惣町乙名頭取
蜂谷園旨
蜂谷忠恒
蜂谷忠倫
浜武元厚　肥前長崎　浜武元興男
浜武元興　肥前長崎　治兵衛　長崎糸割符宿老頭取
浜武よう
林博章　肥前長崎　熊十郎　長崎糸割符宿老
林田尚庸　肥前長崎　又兵衛
林田汎章　肥前長崎　熊三郎
早水和貴　肥前長崎　一学　諏訪神社能楽師
原田中忠
福瑞寺東渓　肥前長崎　福瑞寺僧侶
福田利矩　肥前長崎　町年寄
藤村光鎮　肥前長崎　庸平（姓篠崎とも）　反物目利
船曳大滋　筑後久留米　斎宮　御祖神社祠官
宝輪寺寛儼　肥前長崎　宝輪寺住持

堀江忠良

ま

増山遷永　伊勢山田　平之進　伊勢御師

松田雀翁　肥前長崎

松本しゅん

三田村本義　肥前長崎　太一郎　御救銀会所請払役

道富友明　肥前長崎　七郎　唐物目利

道幸敦化　肥前長崎　小十郎　御救銀会所請払役

三生　肥前佐賀　柴田花守　不二道十世教主

三宅貞材

三輪かち

三輪忠雄

三輪長春

三輪成長　肥前長崎　秀三郎

三輪元貞

三輪元英

武藤陳亮　筑後柳川　弾助　立花藩士

村上在之　肥前長崎

村上尚賢

村上良賢

村山喜文　肥前長崎　喜四郎

桃井光古　肥前長崎　彦三郎　今石灰町乙名（西）

森忠賢　肥前長崎　長崎地役人（岡）

森川久矩　京都　良右衛門　京都糸割符宿老

森田連年

森安宗長

諸熊好足　肥前長崎　祐助　御役所附船番

や

柳信平

山口惟明

山本重智　肥前長崎　物次郎　御役所附町司触頭

山本三春　肥前長崎　直翁

山本泰貞　肥後熊本

豊正道

由布惟則　筑後柳川　立花藩士　惟元父

由布惟元　筑後柳川　権右衛門　立花藩士

吉川孝典

吉川雅珍

吉川宗圭

わ

渡辺知澄　大坂

さて、以下においては右の姓名録を概観し、橿園社中の門人組織に関して論じることとする。一点目は、社中の構成に関して。橿園社中は武士・神官・僧侶・町人・農民等の各階層から構成されており、その中核は地役人により占められていたことが看て取れる。唐蘭貿易を一手に任された長崎会所の諸役人ならびに長崎の自治を司る町役人を始めとして、御救銀会所役人・奉行所役人・長崎糸割符宿老等がその名を列

ねており、地役人が社中の主たる勢力であったことは疑い得ない。それは、岡中正行「長崎の鈴門――歌人近藤光輔を中心に――」[注7]に

長崎の学問、芸術は、唐通事、和蘭通詞をはじめとするこれらの地役人層と、崇福寺をはじめとする諸寺の僧侶、諏訪神社、松森神社、伊勢宮をはじめとする諸神社の神職によって荷われてきたと言ってよい。

と指摘されるごとく、地役人が神官・僧侶とともに同地の文化の中軸を担う存在であったことに起因する。例えば、文政五年長崎来訪の折の広足紀行『夢路日記』（文政五年奥書 自筆稿本一冊）を繙いても、同年頃長崎の地には橿園社中の母胎となる歌壇が地役人を基盤としてすでに形成されつつあったことをうかがわせる。[注8]

○十五日。昼のほど公足・紀まろ来れり。夕つかた、公足がり行て物語す。紀まろ・気風なども来あひぬ。おの〳〵歌よみかはす。

夜は例の公足が家にいたりて古今集講釈す。[の序をときぬ。]

こよひは何がし法師のもとにて古今集春平講ずべきよなればとて、ともなはれ行て、おのれも一うた二うたよみゆときつ。

○廿五日。猶、公足が家にありて気風なども来りぬ。夕つかた此家とじの母なる人、ことかたより来ゐたるに、こはれて源氏物語の花宴巻を解ぬ。

こよひも若紫の巻をときぬ。気風と今一人来ぬ。

○廿八日。公足がり行て物語す。[例の]源氏物語よむ。紀まろなどもきぬ。[注9]

右は、長崎においての歌会・講釈の模様がうかがえる『夢路日記』の記事を時系列に沿いつつ抄出したもの。冒頭の「公足」は、代々オランダ通詞の家柄である楢林の姓を名乗っていることが同書の「公足が氏を楢林といへればなり」の記述に明らかであるものの、片桐一男・服部匡延校訂『年番阿蘭陀通詞史料』（近藤出版社、昭和五十二年）等にその名は著録されておらず、詳細が知れない。しかしながら、長崎滞在中の広足は幾度となく公足のもとを訪れ、同人案内のもと出島

の蘭館・オランダ船見物に訪れており、公足もまたオランダ通詞であることは疑いを得ない。さらに、同じく「紀まろ」も代々通詞の職を勤めた西家の血を引く西吉太夫[注10]である。長崎来訪初期よりオランダ通詞と広足が親交を深めていた模様を垣間見せよう。一方、いま一人の「気風」に関しては、姓が初村であることを除き未詳であるものの、長崎の初村家は代々長崎会所等の役人の職に就いており、気風もまた同様であったかと目される。ともあれ、かく地役人の間において歌会を度々催し物語の講釈を有識の学者に望む機運が高まりつつあったことを『夢路日記』の記事は彷彿とさせる。すなわち、広足の長崎来訪ならびに橿園社中の結社は、長崎の知識層の間における和学への関心の高まりに呼応してなされたといえよう。

次に二点目は、長崎のみならず他国の歌人の歌が入集していることに関して。先述のごとく、橿園社中は長崎のみならず江戸・大坂・京都等の主たる都市の歌人にまでその門戸を拡げていた。その他国の門人は、先掲の『瓊浦集』凡例に明らかなごとく、長崎との何がしかの繋がりが認められる人物である。例えば、先の『要録』の筆者巨智部忠陽は、京都糸割符宿老の職にあり、公務のため度々長崎の地を訪れている。長崎滞在中、事ある毎に広足が催した歌会に足を運ぶ忠陽の姿が『要録』には記されており、広足に歌文の指導を受けていたことがうかがえる。同人を始めとして、堺糸割符宿老海部可昌・大坂糸割符宿老金谷興譲・京都糸割符宿老清水正良・同森川久矩の各人が『瓊浦集』にその名を列ねており、いわゆる五箇所商人の多くが広足と歌文の交わりを結んでいたといえよう。おそらくは忠陽と同じく長崎滞留の間に広足から歌文の手解きを受けていたものであろう。

さらに、五箇所商人のみならず西国諸藩の長崎留守居役もまた、橿園社中の門人録に名を列ねていた。その一人が武藤陳亮である。陳亮は柳川藩の長崎留守居役を長らく勤めた人物。広足の遺稿を集めた中島惟一編『橿園文集』（私家版、明治二十六年）所載の「送武藤陳亮歌之序」に「年ごとのさつきのころよりとつ国ぶねのまゐ来をるほど、おほやけの事かたねもちつゝ、なが月の末つかたにしもたちかへらるゝ」とあることから、長崎警衛のために毎年五月から九月まで長崎を訪れていたことが知れる。陳亮は広足初期の著述である『歴木弁』（天保六年序刊　一冊）序の執筆も依頼されており、殊に広足の信頼が厚く社中の中核を担う存在であった。右の陳亮送別歌の序文においても、とある著名な絵師の手になる絵に各々賛を認めて陳亮の馬の餞とした様子が看て取れ、長崎の雅会の主たる人物の一人であったといえよう。また陳亮に

加え、肥後細川藩の長崎留守居役である志方之倫も同じく広足門人であること、広足『樺島浪風記』（天保十一年以降刊二巻一冊）の記述より明らかである。大坂・京都とならび諸藩の蔵屋敷が軒を列ねた長崎にあって、橿園社中は各藩の長崎留守居役をも組織の一員としていたといえよう。

そしてさらに、諸国の神官等の歌も『瓊浦集』に数多く入集している点、注目される。例えば、筑後大石御祖（みおや）神社神官の船曳大滋、佐賀小城藩士にして諸国を遍歴し不二道十世教主となった柴田花守、肥前島原の庄屋の家に生まれ後に広足の養嗣子となり諏訪神社宮司として橿園社中の跡を継いだ中島広行こと植木貴恒等、近隣諸国の神道に志す者が広足のもとを訪れ、教えを請うていたことがうかがえる。幕末の長崎は、国学の一拠点となっていたといえよう。また、長崎近隣の諸国のみならず、出雲歌人の詠歌が収載されていることも看過してはなるまい。計六首が採られている島重道は、出雲大社上官島重老の子息であり、後に長崎に来訪し長崎伊勢宮神社の第十一代神官となり、明治初期まで同地の主たる歌人の一人として活躍した。同人を始めとして、出雲大社上官の島重胤等の名が『瓊浦集』には列なり（注1）、長崎と出雲の両歌壇が盛んに交流していた事実を彷彿とさせる。近世後期歌壇において中央と地方のみならず地方と地方が深い繋がりを有していたことは、ともに出雲・諏訪の両大社がある土地柄に拠るところもあろうが、両歌壇の成熟のほどを物語る出来事といえようか。

ともあれ、かく『瓊補集』入集の歌人を概観する時、橿園社中は長崎の地役人をその基盤としつつも、一方において他国の糸割符商人・留守居役・神官・僧侶等にまで及ぶ組織であったことが明らかである。いわば長崎と他国を結ぶネットワークの存在が朧気ながらも看取され、橿園社中の文事の実体を解明する鍵は情報にあると目される。以下においては、広足が門人から得た情報に関して論じてゆく。

二　異国情報の収集と橿園社中

現在、諏訪神社には広足ならびに広行の自筆稿本・手沢本が数多く収蔵されている。計数百点にも及ぶ同資料群中において、情報の面から殊に注目されるものが風説書の類である。以下、同社に伝存するオランダ風説書関連の書物を列挙して、書型・巻冊数・外題・内題・丁数・奥書・識語・概要等を示す。なお、便宜上書名の頭にイからホの通し記号を附した。

イ『天保九年より十一年迄風説書』

半紙本（縦二四・五×横一七・六糎）一冊。後掲のロ・ハならびに唐国風説書へ・トとの合綴本。外題は、共紙表紙左肩に「天保九年より十一年迄風説書」と直書。墨付十八丁。巻末に「右之趣咬嚼吧頭役共より申上候様申付越候に付申上候／かひたん／ゑてゆあると／がらんでそん」とあり、それに続けて「右之通申出候に付和解仕原書相添差上申候。以上／子七月」の奥書。同書は、寛永以来毎年幕府への提出が義務づけられていた従来のオランダ風説書と異なり、時の商館長フランディソンが阿片戦争の勃発を報知するために通常の風説書と別に奉じたものである。本文冒頭の「和蘭暦数一千八百三拾八年（天保九戊年にあたる）より四十年迄唐国に於て、エゲレス人等の阿片商法を停止せん為に起りたる事を記す」の言にも明らかなごとく、阿片戦争に至る経緯がおよそ百箇条に亘り記されており、当時の清国の有り様を知り得る書といえる。表紙と一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

ロ『嘉永元年別段申上候風説書申七月』

半紙本（縦二四・四×横一七・六糎）一冊。イ・ハならびに唐国風説書へ・トと合綴。外題は、共紙表紙中央に「嘉永元年／別段申上候風説書／申七月」と直書。内題は「別段申上候風説書」とあり。墨付二十丁。本文末に「かびたん／よふせふへんりい／れひそん」の署名があり、それに続けて「右之趣横文字書付を以申出候に付和解差上申候。以上／通詞目付／大小通詞」の奥書。阿片戦争後の清国ならびに東アジアの情勢、さらに欧州諸国の動向を報知したもの。表紙と一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

ハ『嘉永二年別段風説書酉七月』

半紙本（縦二三・九×横一七・六糎）一冊。前掲イ・ロならびに後掲の唐国風説書へ・トとの合綴本。外題は、共紙表紙中央に「嘉永二年／別段風説書／酉七月」と直書。内題は「別段風説書」とあり。墨付十八丁。本文末に「かひたん／よふせふへんりい／れひそん」の署名があり、続けて「右之趣船頭幷へとる阿蘭陀人申所かひたん承り申上候に付、和解差上申候。以上／酉七月」の奥書。オランダのバリ島征伐、欧州情勢、イギリスとの騒乱の再燃を危惧する声が清国において囁かれていること、欧州諸国が清国へ配備した海軍兵力の詳

細、清国における反乱等が列記されている。表紙・一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

ニ『エケレス人日記和解写』

大本（縦二六・〇×横一九・七糎）二巻一冊。合写本。共紙表紙左肩に「エケレス人日記和解写　全」と直書。墨付三十七丁。天保十三年（一八四二）に呈上された二種類の別段風説書を合写したもの。上巻末に「是迄の処者エケレス与唐国の和睦今以不相整趣に御坐候。此末之儀は来年申上候様可仕候／古かひたん／ゑでゆあるとがらんてそん／新かひたん／ぴいとるあるへるとびつき」とあり、続けて「右之分者昨年丑年可奉指上候処、乗戻候に付無其儀、右之侭当年持渡候間和解奉差上候。此末之儀者近日中奉差上候。以上／寅七月　通詞名略之」の奥書。下巻末に同じく「右等之便三月十五日出之由に而、唐国よりシンカホーレ（地名）に参り候を伝聞仕候／古かひたん／ゑでゆあるとがらんてそん／新かひたん／ひいとるあるへるとびつき」とあり、続けて「右者先達而奉申上候末之儀、此節和解出来仕候に付奉差上候。以上／寅七月／西喜津太夫／本木昌左衛門／中山作三郎／岩瀬弥十郎／楢林鉄之助／森山弥左衛門／名村八左衛門／植村作七郎／石橋助十郎／末永七十郎／西記志十／小川慶右衛門／志築竜太」の奥書。右のイ『天保九年より十一年迄風説書』の続報であり、阿片戦争の顛末を記述したもの。表紙・一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

ホ『欧羅巴一致之国々地方国民之数武方之人数等書中抜萃之訳』

大本（縦二五・六×横一七・二糎）一冊。外題は、共紙表紙左肩に「欧羅巴一致之国々地方国民之数／武方之人数等書中抜萃之訳」と直書。内題も同じく「欧羅巴一致の国々地方国民の数武方の人数等書中抜萃の訳」と墨書。墨付十七丁。奥書は「此書は、弘化二乙巳年夏長崎御目附遠山半□（虫損）衛門殿、通詞名村貞五郎に仰て書せられたるを写したるなり。同年五月二十六日　藤原貴恒」とあり。藤原貴恒は中島広行に改名する以前の名であり、広行がオランダ通詞名村貞五郎本人、もしくはその周辺の人物を介して書写した書であることが看て取れる。書名が示すごとく、オランダ・フランス・ロシア・イギリス等の欧州諸国の地誌・軍備に関して詳述し

た書。表紙・一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

上掲の五書は、阿片戦争を始めとする異国情報に関してオランダ通詞が原書を和訳したものである。各書の表紙にはいずれも「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」の寄贈印が捺されており、広行旧蔵本であることが看て取れる。末尾の書ホ『欧羅巴一致之国々地方国民之数武方之人数等書中抜萃之訳』の奥書に「此書は、弘化二乙巳年夏長崎御目附遠山半□（虫損）衛門殿、通詞名村貞五郎に仰て書せられたるを写したるなり。同年五月二十六日　藤原貴恒」とあることから明らかなごとく、広行は知友のオランダ通詞等を介して異国関連情報の収集に努めていたといえる。また、同社の広行旧蔵本の多くは養父広足から広行に受け継がれたことに鑑みても、右は広行のみならず広足の手沢本である可能性が高く、広足も海外情勢の把捉を試みていたことが想定される。事実、諏訪神社所蔵『雑録　文政七年三月より至十月』（文政七年成立 自筆本一冊）において、広足は「文政七年来泊阿蘭陀人風説書」を抄出し、その末尾に

（注12）

右毎年の風説書大低（ママ）同じ事也。去年のは印度の国中にて少々取合之軍ありしかど、無程静澄のよし、楢林より聞しかどわすれぬ。密風説書といふもの奉れども、是は世人の見る事を秘せ（し給ふ）るよし也。右の和解楢林よりえて書留。

と記している。文中の「楢林」は先述の『夢路日記』の楢林公足と推定され（注13）、広足もまた長崎来訪の初期より門人のオランダ通詞の助力を得て風説書等の異国情報を収集していたといえよう。

さらに、オランダ風説書のみならず唐国風説書関連の資料もまた諏訪神社に数多く伝存している点、注目される。以下オランダ風説書と同じく、書名にへからヌの通し記号を附して列記し、各書の書誌を示す。

へ『嘉永五年唐国風説書』

半紙本（縦二三・七×横一七・六糎）一冊。前掲イ・ロ・ハのオランダ風説書ならびに後掲トとの合綴本。共紙表紙左肩に「嘉永五年／唐国風説書」と直書。墨付五丁。太平天国の乱が勃発する経緯を詳述したもの。表紙・一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文

庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

ト『嘉永七年唐人風説書』

半紙本（縦二四・五×横一七・六糎）一冊。イ・ロ・ハのオランダ風説書ならびに前掲へとの合綴本。共紙表紙左肩に「嘉永七年／唐人風説書」と直書。墨付六丁。本文末に「寅閏七月　王氏十二家船主江星畬楊少棠」とあり、続けて「右之通当節来朝之唐人共風聞之趣和解差上申候。以上／風説役代年番」の奥書。太平天国の乱の戦況、また福建省において新たに生じた内乱を報知した書である。表紙・一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

チ『万延元年唐国騒乱に付十二家船主程稼堂申立書』

半紙本（縦二四・四×横一六・九糎）二巻一冊。共紙表紙左肩に「万延元年唐国騒乱に付／十二家船主程稼堂申立書」と直書。墨付九丁。長崎港入津と上陸の許可を求めた願書ならびに万延元年（一八六〇）の清国騒乱の詳報を合写した書。上巻末の「申五月廿五日　十二家船主程稼堂」の署名に続けて、亡命者十二名の名が記される。下巻末に「申六月　十二家船主程稼堂」の署名。太平天国軍の攻撃を受けて蘇州が陥落し、簒奪の限りが尽くされる模様を記している。表紙・一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

リ『唐国一揆騒乱之地名』

半紙本（縦二四・六×横一六・九糎）一冊。共紙表紙右肩に「唐国一揆騒乱之地名」と直書。墨付五丁。太平天国の乱を始めとして、中国全土において勃発した内乱のために国土が荒れ、人民が疲弊してゆく模様を報知した書。表紙・一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

ヌ〔安政五年唐国風説書〕

半紙本（縦二四・六×横一七・〇糎）一冊。表紙なし。墨付四丁。本文冒頭に「唐国当時賊寇騒逆之風聞左に申上候」とあることに明らかなごとく、前掲の唐国風説書と同じく太平天国の乱に関して報じている。本文末に「午八月　午壱番船主程稼堂楊少棠」の署名。一丁表に「明治三十二年十月／国幣小社諏訪

神社／献本宮司中島広行」（朱文方印 縦四・〇×横四・〇糎）ならびに「長崎／諏訪神社／文庫」（朱文円印 直径四・五糎）の印。

右の五書のいずれもまた「明治三十二年十月／国幣小社諏訪神社／献本宮司中島広行」の印があり、広行旧蔵本であることが明らかである。先掲のオランダ風説書入手におけるオランダ通詞と事情を同じくして、広行もしくは広足が知友の唐通事を介して唐国風説書を書写していたことが想定される。例えば、唐通事周辺の人物からの報せを広足が自らの文事に反映させていたことは、広足『橿園随筆』（嘉永七年刊 二巻二冊）所載の「背燭談」の記事に看て取れる。白楽天詩「背燭共憐深夜月、蹈花同惜少年春」の「背」の読みを「ソムキテ」もしくは「ソムケテ」のいずれに定めるかをめぐる儒学者との論争に際して、広足は門人の唐年行司蘆塚恒徳を介して来舶清人銭少虎の同詩に対する見解を手に入れ、自説の傍証として随筆に示している。同様に恒徳から清人関連の情報を広足が得た例は同『海人のくゞつ』（嘉永三年序刊 一冊）等にあり、広足は情報収集に際して橿園社中の門人ネットワークを活用していたことが諒解されよう。

三　危殆意識の形成と神国思想

さて、かくて異国情報を得た広足がそれを自らの文事に反映させていたことは、古くは大正期の先掲彌富論文において明示され、近くは田中仁『江戸の長歌――『万葉集』の享受と創造――』（森話社、平成二十四年）第二章第四節「詠史・詠物長歌論――中島広足と青木永章の長歌を例に――」に論じられている。両論文ともに近世長崎の地の利を活かした広足歌文の特徴を端的に指摘しており、触発されるところが甚だ大きい。しかしながら、いずれの研究もあくまで文学の範疇に終始している観があり、広足が異国情報をもとにいかなる思想を抱くに至ったか、その点に関しては全く言及がないといわざるを得ない。前節に掲げた風説書関連資料を概観しても、阿片戦争を始めとする十九世紀東アジア情勢の把捉に広足・広行父子が努めていたことは、瞭然たるところである。そこで、両人のもとにもたらされた報に基づき広足がいかなる対外思想を形成していたか、以下において考察してゆく。

天下の士民には常々神国の有難き所をいひ聞せて、皇国は天地神明の守護し給へる国、天皇はもとより天照大御

神の御子孫、将軍家・諸大名の御先祖も皆其皇胤、又さしもなき氏々もそれ〴〵の神の御末、天下諸民に至るまで悉く神孫の国たる尊き処をくれ〴〵もいひをしへおき、外国は先祖も正しからぬ獣類同様の人種と甚しく卑しめおとしおかざれば、まさかの時に誠心より命をすてゝ皇国の為に忠を尽し天下の為に打死するもの、少なかるべし。すべて道の本意は、天下士民の心を正直にして、たゞひたすらに我に靡き随ひ、一大事の時我為に死するを栄とするやうにあらしめんとの事なれば、常々神国の勝れたる所、皇国本原の道の道たる所をくれ〴〵いひさとし教へおき、決て外国の美をかたるまじき事也。(注14)

国会図書館蔵の広足『童子問答』(弘化頃成立 二巻附録一巻五冊)所載の一節である。日本が神に護られた国であること、また天皇を始め士民に至るまでいずれも神孫であることを称揚し、一方において諸外国の先祖を甚だしく貶めた記述は、まさしく幕末に声高に叫ばれた神国思想の顕著な例といえよう。従来、文学研究の観点からは広足の異国情緒あふれる歌文の存在のみが指摘されてきたが、その反面戦時中の軍国主義の萌芽とも思しき一面を広足が有していたことは、その学問大系を把捉するに際して看過してはなるまい。同じく神国史観を述べた件は、広足『敏鎌』(嘉永六年刊 一冊)、同『弁征韓論』(近世末期成立 写本一冊)、同『頭椎剣』(安政六年序写 一冊)、同『なやらひ』(近世末期成立 写本一冊)、同『ねをびれ言弁』(近世末期成立 写本一冊)等にあり、広足が神国思想を意図して説き広めていたことは疑い得ないところである。

他方、市井の一学者に過ぎない広足が何故かくもラディカルな国家論を展開したか、疑問が残る。広足が説く「すべて道の本意は、天下士民の心を正直にして、たゞひたすらに我に靡き随ひ、一大事の時我為に死するを栄とするやうにあらしめんとの事」とは、まさに神国思想のもとに人民の挙国一致を促す治国論である。(注15) 細川藩を致仕して藩政に参与することもない広足を駆り立てたものとは何か。それは、右の「一大事の時」の文言に象徴される危殆意識の高まりであったといえまいか。上述の神国史観を記した広足著述のいずれにおいても、広足は常に有事を想定して、国家ならびに君主に対して臣民が絶対的な忠誠を誓うための人心掌握術を論じている。つまり、長崎において対外情勢に精通し華夷変態を目の当たりにしたことが広足に欧米諸国の侵攻を眼前の問題として認識させ、国家の危機に瀕して挙国一致を実現するための手段としての神国思想を抱かせたと推察されるのである。

そもそも、広足が危機意識を形成した発端は、文政十一年（一八二八）のシーボルト事件にあった。

○答云。是は定而、阿蘭陀流などより出たる御料簡と被存候。甚以あしき事に候。蒙古襲来の時のは、天皇御みづから神祇官に行幸まし〳〵て祈らせ給ひ、伊勢を初て諸国の大社に奉幣使を立られ候ほどの御事、神風なる事は勿論、今さら兎や角申までも無御座候。先年吹たる大風も、此方の人民田畑等少々損じは致候へども、全く神風にて、彼蘭人国禁を犯したる事ども、其節顕はれ候趣なるも、誠に神の御心と被存候也。若左様の事つもり行、段々ゆるかせに相成候末は、いかなる大変、出来すまじきも難斗、其時は何にも替へがたく、人民田畑の損所位は、なんでもなき事に候。我国の人は、随分神威の難有所を我も信仰し、人にもいひ聞せて、くれ〴〵も人情厚く致すべき事に候。神国の神国たる所を信じたる敦厚の人ならでは、まさかの時の用には立不申候。(注16)

右は、童子の「蒙古襲来之時の大風を神風と申はいかゞ。是はたゞ、其時幸ひ自然と吹たる風に可有御座候。兎角日本人は、物に惑はされ安く候かと被存候。いかゞ」の問いに対して、広足が反駁した西尾市岩瀬文庫蔵『童子問答』（天保三年奥書 自筆稿本一冊）の一条。現存する広足著述を繙く限りにおいて、広足が初めて有事を想定して神国史観を開陳した記述である。文中「彼蘭人国禁を犯したる事ども」は、シーボルトが日本地図の国外流出を目論んだいわゆるシーボルト事件を指す。広足は同事件に関して「若左様の事つもり行、段々ゆるかせに相成候末は、いかなる大変、出来すまじきも難斗」と言及しており、国防上機密とすべき地図が外国人の手に渡る事態を招いた世の風潮に対して警鐘を鳴らしていたことが知れる。同書の筆が執られた天保初頭、長崎の地は文化元年（一八〇四）のロシア使節レザノフの来航、同五年（一八〇八）のイギリス軍艦フェートン号の事件等、度重なる異国船の出没をすでに経験しており、警戒を強めていた。広足もまた外圧の高まりを同地において実感していたことは、広足『後夢路日記』（文政六年奥書 自筆稿本上下二巻一冊）七月六日の記事にフェートン号事件のあらましが綴られていることからもうかがい知れる。すなわち、外寇が眼前の問題として取り沙汰される最中に広足はシーボルト事件に遭遇したといえよう。同事件から受けた広足の衝撃は、叙上の「いかなる大変、出来すまじきも難斗」の言辞からも十分に察せられる。幕末の長崎においてかかる未曾有の事件に接したこと

により、広足は国家危殆の時である状況を認識し、有事に際しての神国思想の構築、そしてさらなる対外情勢の把握に努めたと結論づけられる。

（以下次号）

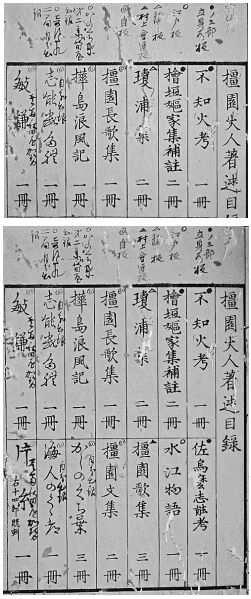
注

注1　平成十七年六月。

注2　「國語國文」第二巻第五・六号、昭和七年五・六月。

注3　「國學院雑誌」第二十八巻第十号、大正十一年十月。

注4　『瓊浦集』の刊行に際して橿園社中が出資していたことは、諏訪神社に伝存する広足手沢書入れ本『かたいと』（嘉永六年刊一冊）巻末の広告に明らかである。同広告の『瓊浦集』の箇所には社中板であることを示す「△」印が広足筆の朱書にて記されている。以下にその図版を掲げておく。



注5　以下の引用文は、私に句読点・濁点を施した。また、漢字は通行の字体、片仮名は平仮名に適宜改めた。ただし、西洋の人名・地名・国名・船名等を表した語は、原本に忠実に表記し、清濁も原本に順った。なお、同書の引用は九州大学附属中央図書館蔵本に拠った。整理番号〈支子文庫／911／ケ-8／1－1・2〉。静嘉堂文庫所蔵『瓊浦集』には「西」（朱文円印 直径一・〇糎）の印が捺され、また明治二十一年一月一日付西純三宛書簡の断簡が「瓊浦集人名之内」半紙二葉とともに附載されている。西純三なる人物の詳細は知れないが、明治頃に同人が「瓊浦集人名之内」と題した人名録を作成したと推定される。光輔以下五十名の歌人の通称名と職務が記されており、筆者が特定し得た各歌人の経歴とその多くが合致する。ゆえに、調べの及ばない人物に関しては、同人名録に順った。

注6　「帝京大学文学部紀要国語国文学」第十六号、昭和五十九年十月。

注7　広足が初めて長崎を訪れた折、同地の歌壇を主催していた歌人は岡部春平である。広足が長崎に移住して後、春平は出雲に活動の拠点を移したこと、また広足の初度長崎来訪が春平を訪ねての旅であったことに鑑みて、広足は春平の後任となるために長崎に赴いたと推定される。しかしながら、その証左となる事柄はいまだ見出せず、断定は差し控えたい。

注8　引用は、国立国会図書館蔵本『夢路日記』に拠る。整理番号〈915.5-N568y〉。

注9　前述の『夢路日記』には、当初「西吉太夫」の名が記されるも、同名を抹消して「紀麿」に改めた箇所がある。通常立ち入ることの許されない出島に広足が足を踏み入れた記事も同日記には収載されており、関与した通詞の名が表に出ることを憚り、雅号を用いたと推察される。西吉太夫は、長崎歴史文化博物館所蔵『阿蘭陀通詞方分限帳』（近世後期写 一冊）に「通詞目付」として著録される。

注10　出雲歌人の歌が『瓊浦集』に入集していることに関して、中澤伸弘氏より御教示を賜った。

注11

注12　『諏訪文庫　中島廣足自筆稿本展目録』（諏訪神社、平成十四年）の記述に拠る。

注13　同風説書が書写された文政七年（一八二四）、広足は九月十三日に長崎の公足のもとを訪れ二日間滞在していたことが広足『夢路日記』（文政七年奥書 自筆稿本一冊）に記されている。同年頃、広足と公足が親交を殊に深めていたことは、複数の広足日記の記事にうかがい知れる。

注14　引用は、国会図書館蔵本に拠る。整理番号〈121.2-N568d〉。

注15　肥前唐津藩主小笠原長行・肥前島原藩家老板倉勝彪・肥前平戸藩主松浦熙・長崎奉行川村修就を始めとして、広足は西国諸藩の藩主・家老・奉行等の藩政・幕政を掌る人物とも誼を結んでおり、あるいはいずれかのブレーンとしての役割を担っていたためかとも推定される。また、広足の国学思想は幕末の志士を育てた吉田松陰等の勤王思想家にも影響を与えており、同時期における広足学の反響は改めて検証されるべき課題といえる。

注16　引用は西尾市岩瀬文庫蔵本に拠る。整理番号〈111.38／100／96〉。

【附記】資料の閲覧に際しまして、御理解を賜りました各所蔵機関に記して深謝申し上げます。なお、本稿は平成二十三・二十四年度科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号23・5299）ならびに平成二十五・二十六年度科学研究費補助金研究活動スタート支援（課題番号25884090）による研究成果の一部である。

（きら　ふみあき・福岡国際大学講師）